

博士学位論文審査要旨

2020年12月23日

論文題目： 才能・努力をほめることが「ほめ手」に与える効果—失敗経験後の動機づけへの効果とマインドセットによる媒介過程の検討—

学位申請者： 柿沼 亨祐

審査委員：

主査： 心理学研究科 教授 田中 あゆみ

副査： 心理学研究科 教授 中谷内 一也

副査： 心理学研究科 教授 及川 昌典

要 旨：

教育現場において、ほめることには、生徒の学習意欲の向上などのポジティブな効果が期待されているが、これまでの研究は、才能を評価するほめには、特に失敗経験後の動機づけにネガティブな影響があることを示している。これは主に、才能をほめることで、能力が固定的で変えることができないとする信念（固定マインドセット）を促すからとされている。本論文では、このようなほめの影響が、ほめられた人のみではなく、ほめを与えた人にもあるという可能性を新たに検討する一連の研究を行った。研究は以下の4つの審査論文にまとめられている。

柿沼・田中（2018, ソーシャル・モチベーション研究）では、以降の研究で使用するための接近気質尺度の日本語版の作成を行った。

Kakinuma et al. (2020, JXE) は3つの研究から構成される。研究1では、横断調査から、才能をほめる頻度と成長マインドセットの間に有意な負の関連を見出した。研究2ではシナリオを用いてほめを記述させる実験を、研究3ではほめの対象者が存在する状態での実験を行い、才能ほめから失敗経験後の課題の楽しさに対する有意な負の効果を見出した。また、才能ほめから課題の楽しさへの影響を介して課題パフォーマンスに影響するという有意な負の間接効果があった。マインドセットによる媒介効果、接近気質による調整効果はみられなかった。

Kakinuma et al. (2020, Frontiers in Psychology) では、2つの実験により、対面で実際に行う才能ほめの影響を検討した。課題の楽しさの行動指標として用いた、アイトラッカーで測定された自由時間の課題への注意エンゲージメントに対して、才能ほめの負の影響が中程度の効果量で認められた。

Kakinuma et al. (in press, SBP) では、ほめ手と受け手の要因の影響を比較し、また、ほめの効果を非学業的な領域へ一般化するために、料理の場面を設定してシナリオを用いた実験を行った。その結果、才能ほめの影響はみとめられなかったが、努力ほめから料理の成長マインドセットに対する有意な正の主効果と、その影響を介した料理の粘り強さへ有意な正の間接効果があり、領域による違いが示唆された。

以上より、才能ほめはほめ手の失敗経験後の動機づけに負の影響を与える可能性が高く、そのメカニズムについては解明できなかったものの、ほめの受け手に関する先行研究と類似した影響が与え手についても存在すると考えられる。本論文は与え手という新しい視点からほめの影響を明らかにした点で学術的な意義があり、才能に関するほめを注意して使用するべきという知見は教育実践においても意義があるものである。

よって、本論文は、博士（心理学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2020年12月23日

論文題目： 才能・努力をほめることが「ほめ手」に与える効果—失敗経験後の動機づけへの効果とマインドセットによる媒介過程の検討—

学位申請者： 柿沼 亨祐

審査委員：

主査： 心理学研究科 教授 田中 あゆみ

副査： 心理学研究科 教授 中谷内 一也

副査： 心理学研究科 教授 及川 昌典

要 旨：

論文「才能・努力をほめることが「ほめ手」に与える効果—失敗経験後の動機づけへの効果とマインドセットによる媒介過程の検討—」を提出した学位申請者に対する総合試験を、上記審査委員3名が2020年12月23日（水曜日）13時15分より、同志社大学京田辺キャンパス香柏館低層棟105号室において、約2時間にわたり実施した。

総合試験の冒頭で学位申請者は論文の概要を説明し、その後審査委員から、ほめ手への効果のメカニズムや、結果の応用可能性等に関する専門的質疑がなされた。学位申請者の応答はいずれも適切かつ満足できるレベルにあり、本論文の学術的価値が証明され、学位申請者の研究能力が十分であることを確認した。また、本研究の基礎となる教育心理学領域における専門知識および学力を十分に有することも確認した。

語学試験（英語）については、申請者は英文学術誌で3本の英語論文を第一著者として発表しており、論文における文献引用でも数多くの英語論文が網羅されていることから、学位申請者の研究に必要な英語運用能力について十分であると判断した。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 才能・努力をほめることが「ほめ手」に与える効果
—失敗経験後の動機づけへの効果と
マインドセットによる媒介過程の検討—

氏名： 柿沼 亨祐

要旨：

ほめることは教育現場で注目を集め、教師が生徒をほめることや (文部科学省, 2017)、生徒間でほめ合うことが推奨されている (福岡県教育委員会, 2015)。ほめることは生徒の学習意欲の向上などのポジティブな効果が期待されているだろう。これまでの研究は、ほめ方による影響の違いを検討しており、驚くべきことに、いくつかのほめ方は受け手にネガティブな影響を与えることを示している (Corpus & Good, 2020)。

多くの研究は、才能を評価するほめ (e.g., かしこいね) と、努力を評価するほめ (e.g., 頑張ったね) の影響について検討している (Henderlong & Lepper, 2002)。それらの研究は、才能・努力ほめの影響の違いは、特に、ほめられた人がその後失敗を経験したときにみられることを示している。たとえば、Mueller & Dweck (1998) は、努力ほめは受け手の失敗経験後の課題の楽しさ・粘り強さ・課題パフォーマンスに正の影響を与える一方で、才能ほめはそれらの変数に負の影響を与えることを示した。その理由については、能力に関する信念であるマインドセットとの関連から主に説明がなされている (Dweck, 2000)。努力をほめられた人は、能力は努力次第で変えることができるとする成長マインドセットが促され、失敗を経験した後も適応的な反応を示す一方で、才能をほめられた人は、能力は固定的で変えることはできないとする固定マインドセットが促され、失敗経験後に不適応的な反応を示すと述べられている (Gunderson et al., 2018)。

このように、先行研究はほめの受け手への影響のみを検討してきた。しかし、社会的な行動がその受け手だけでなく与え手にも影響することをふまえると (e.g., Weinstein & Ryan, 2010)、ほめることは、ほめられた人のみではなく、ほめを与えた人、つまり「ほめ手」にも影響するのではないだろうか。生徒同士のほめ合いが推奨されている教育現場では、生徒はほめを受けるだけでなく与える側にもなりうることから、ほめ手への影響についても検討する必要があるだろう。

ほめ手への影響の理論的根拠となるのは、Saying is believing 効果に関する研究である (Higgins & Rholes, 1978)。その研究によると、他者にメッセージを伝達することは、話し手の認知を、伝達した内容と一致するように変容させる。この効果にもとづく、ほめることはほめ手に対して受け手と同様の影響を与えると考えられる。つまり、才能ほめはほめ手の失敗経験後の動機づけへ負の影響、努力ほめは正の影響があると予測される。

さらに、ほめを評価に関するポジティブな刺激ととらえると (Kanouse et al., 1981)、このようなほめ手への影響にはポジティブな刺激への感受性による個人差が存在する可能性がある。ポジティブな刺激は気質としての反応傾向と一致した場合に処理がされやすいことから (Gomez & Gomez, 2002)、ポジティブな刺激への感受性である接近気質 (Elliot & Thrash, 2010) が高い人のほうが、低い人に比べて、才能・努力ほめからの影響が大きいことが予測される。

また、ほめ手への影響に認知的不協和 (Festinger, 1957) も関連している可能性がある。先行研究は、人は自分の態度と反する内容について説得を行った場合、不協和が生じ、その不協和を低減させるために、説得内容と一貫するように態度を変化させることを示している (Elliot &

Devine, 1994)。さらに、不協和の影響が生じるために、説得を行う方が説得を受けるよりも態度への影響が大きいことを示している (Watts, 1967)。これらの知見にもとづくと、元のマインドセットと異なるタイプのほめを行った場合 (e.g., 成長マインドセットを持つ人が才能ほめを行う)、不協和が生じ、ほめ手への影響が大きくなると予測される。さらに、ほめ手の方が受け手よりも才能・努力ほめの影響を大きく受けると予測される。

以上のことをふまえて、本論文では才能・努力ほめがほめ手に与える効果について検討した。主要な目的としてほめ手の失敗経験後の動機づけへの効果について検討した。動機づけの指標として、ほめの受け手の研究と同様に、課題の楽しさ・粘り強さへの影響を検討した。加えて、課題パフォーマンスへの影響も検討した。さらに、ほめ手の失敗経験後の動機づけへの影響のメカニズムとして、マインドセットによる媒介過程の検討を行った。また、ほめ手への影響の理論的背景との整合性を検討するために、接近気質の調整効果の検討・元のマインドセットとほめ方の交互作用の検討・ほめ手への影響と受け手への影響の比較検討も行った。本論文は4つの審査論文から構成されている。

柿沼・田中 (2018) では、以降の研究で使用するための接近気質尺度の日本語版の作成を行った。大学生を対象に調査を実施した結果、接近気質尺度日本語版は高い信頼性と妥当性を備えていることが示された。

Kakinuma et al. (2020, *JXE*) では、ほめ手への影響を検討するための3つの研究を大学生を対象に実施した。研究1では、才能や努力についてほめる頻度と知能のマインドセットとの関連を検討する横断調査を行った。分析の結果、才能をほめる頻度と成長マインドセットの間に有意な負の関連がみられた。努力をほめる頻度と成長マインドセットの正の関連は有意ではなかったものの、その効果量は才能をほめる頻度と成長マインドセットとの関連と同程度であった。横断調査では因果関係を想定できないため、研究2・研究3ではほめ手への影響について実験的な検討を行った。研究2では想像上の他者に対してほめを記述するシナリオ実験を、研究3では実在する他者に対してほめを記述する実験室実験を行った。その結果、両実験において、才能ほめから失敗経験後の課題の楽しさに対する有意な負の効果が示された。課題パフォーマンスについては直接効果はみられなかったものの、才能ほめから課題の楽しさへの影響を介して課題パフォーマンスに影響するという有意な負の間接効果がみられた。マインドセットによる媒介効果、元のマインドセットによる予測された調整効果、接近気質による調整効果はみられなかった。努力ほめの影響はいずれの変数に対してもみられなかった。以上の結果から、才能ほめはほめ手の失敗経験後の課題の楽しさに負の影響を与える可能性が示された。

Kakinuma et al. (2020, *Frontiers in Psychology*) では、Kakinuma et al. (2020, *JXE*) での記述によるほめの操作に生態学的妥当性の面で問題があったことをふまえて、対面状況を設定した2つの実験を実施して、才能ほめの影響について更なる検討を行った。さらに、課題の楽しさの行動指標として、自由時間の間の課題への注意エンゲージメントをアイトラッカーを用いて測定した。メタ分析で2つの実験結果を統合し、ベイズファクターと効果量を算出した。まず、自己報告指標の課題の楽しさに対しては、ベイズファクターの値は低く、効果量の信用区間にも0が含まれ、予測は支持されなかった。しかし、行動指標の注意エンゲージメントに関しては、ベイズファクターは中程度の値であり、効果量は中程度の負の値を示した。これらの結果から、対面状況において、才能ほめは行動指標で測定されたほめ手の失敗経験後の課題の楽しさに負の影響を与えることが示唆された。

Kakinuma et al. (in press, *SBP*) では、ほめ手への影響と受け手への影響を比較するために、ほめ手と受け手の要因の同時操作を行った。加えて、ほめの効果を非学業的な領域へ一般化するために、料理の場面を設定してシナリオ実験を行った。大学生を、3 ほめ方 (才能ほめ・努力ほめ・ほめなし) × 2 行為 (受け手・与え手) からなる6つの群のいずれかに割り振った。分析の結果、才能ほめの影響はいずれの変数に対してもみられなかった。努力ほめについては、

料理の粘り強さに対する直接効果はみられなかったものの、料理の成長マインドセットに有意な正の影響を与え、その影響を介して料理の粘り強さへ有意な正の間接効果を与えていた。ほめ方と行為の交互作用については有意な効果はみられなかった。つまり、受け手か与え手かにかかわらず、努力ほめは料理の成長マインドセットを促す可能性が示された。

一連の研究の結果、努力ほめに関しては失敗経験後の動機づけに対する直接効果はみられなかった一方で、才能ほめはほめ手の失敗経験後の動機づけに負の影響を与える可能性が示された。このことから、才能ほめはほめ手に対して受け手と類似した影響を与えることが示唆された。本論文は与え手というこれまでとは異なる新しい視点からほめの影響を明らかにした点で学術的な意義があるだろう。

さらに本論文は実践的な意義もある。近年、ほめはさまざまな教育方針に取り入れられ、いくつかの学校では生徒同士でほめ合うことも推奨されている。このような方針に対して、本論文は、ほめは注意して使用すべきであることを示唆する。本論文ではほめ手の動機づけに対して、才能ほめはむしろネガティブな影響を与えることを示した。このような知見にもとづくと、少なくとも才能焦点的な言葉を使ってほめることは控えるべきだと考えられる。